

## 古茂山収容所

宗像市 渡部 公之

旧満州、ソ連、朝鮮の国境近くの中国師嶺という山中で終戦を迎えた私は、これで命びろいをしたと胸をなでおろした。

昭和20年8月14日に作戦第1命令を受け吉野、上浦二等兵と共に、水の流れのない川底に駐止し、斥候として行くことになっていたが、命令は一時待機という状況下で終戦を迎えたのである。3組の斥候中、2組は山の頂上で、私の率いる組は川底で、ソ連軍の戦車が進撃して来ることは火を見るより明らかなところである。中国師嶺の8月は春の花、夏から秋にかけての花々が一時期に山一面に咲き乱れるが、一方虎の出没する奥山であった。

そこで鶴嘴（十字鋏）、円匙、のみ等を使って幼稚な作業の陣地構築をしていた。勿論兵器は中隊に半分程しかなかった。そして終戦と共に朝鮮人初年兵20余名は即刻退役、その他の者は武装解除を受けたのである。

一旦軍隊組織が解体すると、今迄整然としていた隊伍は烏合の衆と化し、見られたものではない。武装解除を受けた後は、薄汚れた軍服を着てマンドリン（弾装部分が円形をした機関銃）を抱えたソ連兵の看視の中に間島の収容所に向った。彼等は風が吹き通信紙等が散ると我先にと拾いあさる。

間島収容所での3ヶ月半程の生活はばたばた過ぎて、12月30日朝方約1000人が貨車に乗せられた。機関車は南に向いている。祖国に帰れるのかと、半信半疑であった。

鉄製の貨車は、50cm角程の鉄格子の窓が2m程の高さの処に4ヶ所あいている。その中では膝をのばして坐るのがやっとといった有様で、1貨車に100人程乗せられたであろう。汽車はいつ発つとも分からないまま一夜は明けた。貨車の四隅は下から1m程は真白に凍り付いている。その隅に私は陣取っていた。食事は各人氣ままに、ブリキ缶で作ったコンロに、板切れを割箸程に切って燃やし、雪を解しては煮炊きをし、そして暖を取った。

その煙は貨車一面に漂って目に染み、涙がぼろぼろと流れる。汽車はのろのろと30分程走っては止まり、3、4時間してまた走り出すといった調子で、2日目には寒さの為死者が出て、雪を掘って屍を埋める様を見た。

外は零下20度雪は降ったり止んだり、普通なら5、6時間で着く距離を3日3晩貨車の中に詰込まれて21年1月2日昼頃冷え切った体を震わせながら古茂山駅で下車した。山も野も一面雪景色に覆われて、吐く息は凍り足元は滑る。30分程で収容所に辿り着いた。ここは日露戦争の時ロシアの捕虜の収容所があったところと聞き、その因縁に驚いたのである。棟続きの平家建ての校舎のような建物に、1個分隊5、6坪程の板張りを与えられ、そこに筵で床を作り、分隊員を配置してから、私は一番奥の窓際に「寒気がして頭が痛い」と言って横になった。側にいた芝上等兵が額に手を当てると物凄い熱である。早速軍医を呼んで見てもらうと、

熱は40度急性肺炎ということですからすぐ病院に運ばれて行った。

ここ古茂山には、小野田セメントの石灰石の採石場があり、町全体に朝鮮人労働者の宿舎があちこちに点在している。その2軒が急場凌ぎの病棟になっていた。1軒の広さは6畳程のオンドルの部屋が2部屋、便所と炊事場が付いた小さな家だった。その6畳の部屋には既に数十人の患者が、足を交互に差し込んで寝ている。私もその窮屈な中に綴じ込められた。

それから何日かというものの夢うつつで憶えていることといえば、注射をしてもらう時の楽しみだけだった。オンドルの暖かさはちょうど火葬場の窯の中に入って焙られているような感じで、そして草原の中に1本の道が一直線に通っている。その両側には四季の花が一杯咲いて、遠くの方で盛んに私を手招きして叫んでいる。

炊事場はセメント張りの床であるが一面氷が張って、そこに私はある日引っ繰り返っていた。いつも私を看護していた渡辺衛生上等兵が巡回して来た時に、私の姿が見えない。たまたまその日私の右隣に寝ていた白川軍曹が息を引き取ったばかりなので、気持ちを悪くして、どこかに行っているのだらうくらいに思い、さほど気にも止めていなかったらしい。

2、3時間たって来て見た時もやはり床は空だ。あわてて狭い家の中を捜すと、炊事場の氷の床にあおむきに倒れているを見つけ、元の床に抱えて来た。そうしてカンフル注射を打つと一時して、脈を取り戻したというのである。それから重湯も喉に通らぬ日が何日か続いたが、次第に回復するにつれて、朝夕2回の三分粥1合と梅干し1つが待ち遠しくなり、今度は飢えとの闘いの日々が続く。

耳を傾けると、大分元気になった患者達は、木村屋のパンは美味だの、西洋軒のピフテキが食べたい等、色気は抜きに食物の話ばかりに時を過している。

私はそれよりも現実的な事を考えていた。1日も早く退院して分隊に帰ったら、白米の飯に塩を振り掛けて鱈腹食べてみたいと思っていた。ふと枕元の自分の持物を調べてみると、上等の飯盒はすり替えられ、白米やら食料品も多少は持って来たのだが1つも無い。

2週間も過ぎた頃と思う。大分気分も好く座することも出来るようになると、今迄なんともなかった体が痒くてならない。調べてみると下着や毛布のチョッキに虱が鈴生りに住んでいる。根気よく1匹1匹潰し300匹くらい数えていたが、まだまだとてもとても親指の2つの爪は血で染った。

かなり元気な患者は入浴ができ、その合間に衣類は熱気消毒されるそうだ。早速軍医に御伺いをたてたら、「まだまだその体では無理だ」ということで引き下がって来た。体の痒みは四六時中止まない。思いあまって3日目にまた行ったら、今度は何とか許可を得て入浴できた。その夜はとても気持ちよく寝れたのは勿論である。病が順調に回復するに比例してひもじさも激しくなり、コーリヤンの五分粥では我慢が出来なくなった。20日くらい過ぎたある日軍医のところに行き無理矢理「退院させて下さい」と頼み込んだ。初めの中はしぶっていたが「よかろう」ということになり、その翌日荷物を肩に担って、杖を頼りにとぼとぼと帰隊していった。豚の毛のように黒く固かった頭髪は、薄茶色に変り頭の上にはばらばらとあるだけで、体は

肋骨が洗濯板のように浮き出して痩せていた。退院する時衛生兵が体温表をみせてくれた。1週間ほど40度の熱が続き急降下しておる。そしてまた急上昇したが次第に平熱におさまって行った。考えてみると急降下した時が、生と死の境をさ迷っていたのだろう。

奇跡的に助かった体を引摺り帰隊して、すぐに戦友に頼んで白米の飯を炊いてもらい、塩を掛けて腹一杯食べたその味は終生忘れられない。日がたつにつれて体中の汗穴が紫色に脹れあがり、歯茎から血が滲み出る。ビタミンCの不足による壊血病と軍医はいった。

回りは山に囲まれているが山は一面は雪、緑といえば松葉くらいしかない。松葉を1日200程缺でこまかく刻むのが1日の仕事で、それを水で胃の中に流し込んでいた。松葉採りに山陵に登ると足の膝ががくがくする。塩分が不足だといわれた。給食は白米はめったにあがらない。朝昼晩大豆の粥、皮も餡も大豆の万十、豆腐、モヤシ、油揚等に明太の干し物といった具合で栄養は片寄っていた。5月ともなれば山も若葉が繁り緑を取り戻したが、食用になる蓬、あかざ、のびる等の野草は健康な者が取りつくして1つもない。相変らず松葉を吞んでビタミン補給に余念がない。

部屋で駄法螺話を寝そべってきいていた大阪出身の梁木と云う40過ぎの召集兵が寝返りも打たなくなったので見てみると、栄養失調のため死んでいるのである。それから1ヶ月程たったある日、2人の逃亡兵が捕まった。

收容所の中央広場に全員を集めて、みせしめのためにと銃殺の現場に立合わせた。

予め長穴を掘ってあった盛土の上に2人は立たされた。目隠し用の白布を渡そうとすると2人はそれを拒否した。

20m程離れた所にソ連兵10人、指揮官の号令で構え筒をして一斉に射撃した。1人は前に1人は後方に倒れた。それは立派な最後であったが、官、姓名は知るよしもない。

死体は先に栄養失調でなくなった梁木二等兵と同じ川向うの山の麓に我々の手で埋められた。しかし大雨でも降れば小川は増水して死体は流されるだろうと思うほど穴は浅かった。こんないやな思いでの古茂山も8月下旬にまた貨車に乗り南下して光南という港町に着いた。1週間程この町におったが上船待ち。

日本に帰るかと思っていたのもつかの間、上陸したところはポセットというソ連領であった。そしてまた2年余の抑留生活が続くのである。